

## 胡風と『時事類編』<sup>(1)</sup>

(付 『時事類編』 所載の胡風翻譯目錄)

千 野 拓 政

はじめに

一九三三年六月十五日歸國した胡風<sup>(2)</sup>は、その後中山文化教育館發行の雜誌『時事類編』に多數の翻譯を發表するかたわら、左連の指導部にはいり宣傳部長、行政書記として活躍する。この間ほかに執筆した文章はごくわずかで、『時事類編』と左連の仕事がこの時期胡風の生活の中心であったことは疑いを入れない。ところが一年後の一九三四年十月末(ないしは十一月初)胡風は國民黨との關係が噂されたため左連指導部を追われ、これと前後して『時事類編』の仕事も辭することになった。しかもこの噂は當時の胡風の人生を狂わせただけでなく、解放後胡風批判において、あるいはその後も文革後の名譽回復前まで、長く罪状とされ、彼を束縛し續けたの

である。

彼にこうした悲劇をもたらした噂の根據となったのは、胡風が中山文化教育館の『時事類編』で仕事をしていたという事實に他ならなかった。今日の眼から見れば、中山文化教育館での仕事がただちに國民黨との關係に結びつけられることの當否は、もはや明らかであるといってもよい。だが、ここで仕事をしたことが、彼の人生を長く呪縛する結果になり、またその仕事彼の祖國における活動の出發點に當っていたことも確かなのである。それを思えば、中山文化教育館が實際にはどのような組織であり、『時事類編』とはどのような雜誌で、そこで胡風がどのような仕事をし、そしてそれが胡風にとってどんな意味があったのかという問題は、胡風の生平を知る上でも、また彼の文藝思想の發展を考える上でも、

92 今なお明らかにされねばならないことだらう。

ここでは筆者の調べ得た範囲で、中山文化教育館および『時事類編』について、またそこにおける胡風の活動について紹介してみたい。

### 一 中山文化教育館の活動

中山文化教育館は「中山先生の主義と學説を明らかにし、三民主義の文化と教育の基礎を打ち建て、民族の生命を育成し、中山先生を文化の上に永遠に留めて紀念することを主旨<sup>③</sup>」として設立された文化教育機關である。その設立の経過は、館長であった孫科（孫文の長男）の回憶によれば次のようなものであった。

……民國二十一年（一九三二年）の冬、わたしは上海へ旅行し、黨の中・上層の同志と往來を重ねた。その頃誰もがわが國の基礎を固める必要を感じていた。そして實際、軍事的政治的力量のみならず、文化面でも基礎固めがなされるべきであった。元來中國の文化の源流は古く、四五千年の歴史を有している。それが總理（孫文——引用者）の三民主義に至って集大成されたのである。しかし當時の情勢といえば、わが黨の文化的基盤はきわめ

て薄弱で、マルクス主義がずいぶん流行し、社會科學の書物の多くはその影響を受けていた。そのため有識者はみな三民主義文化の再興を計り、これを發揚する必要があることを認識するに至った。そこで「中山文化教育館」の組織が發案されたのである。<sup>④</sup>

こうした文化教育館の設立趣旨は、三一年十一月の國民黨四全大會で採擇された「黨義教育實施方法改進案」の延長線上にある。<sup>⑤</sup>したがって當然のことながら同館の發起人には蔣介石はじめ國民黨の要人が名を連ねているし、財政的基盤も黨中央から月額五萬元、上海市政府から月額五萬元の補助が與えられ、國民黨によってその活動が支えられたのである。<sup>⑥</sup>

しかし中山文化教育館は國民黨の黨内組織ではなかった。孫科はさらに續けてこう述べている。

本來總理の建國の教えはわが黨だけのものではなく、全國民の公共財産である。だから道理から言えばこの館を政府あるいは黨が設立してもおかしくはない。しかし當時國內の文化事業は十中八九黨外文化人の手に握られており、一般の學生や教員は、三民主義は國民黨の經典にすぎないという誤まった觀念を持っていた。このような情勢の下で、さらに中山文化教育館を黨と政府の手で設

立すれば、ますます誤解を招くことになる。そこでみんなの意見として、個人名義で發起し、民間の學術組織とする<sup>(8)</sup>ことが打ち出された。かくて翌年一月發起人會議が開かれた……。

中山文化教育館は意圖的に國民黨から分離して設立された民間の文化教育機關だったのである。しかも人員構成を見ると、後述のように黨中央と對立する立場にあつた孫科に近い人物、および黨外の民主人士が重要な位置を占めている。

こうした背景の下、一九三三年三月十二日首都南京の陵園で成立大會が行われ、中山文化教育館は活動を開始した。南京を中心として各地に分館を設けることが決められていたが、實際には南京の本館が完成するまで上海フランス租界福熙路八〇三號で業務が進められた。胡風が同館で仕事をしたのもこの期間である。教育館が南京に移るのは、三五年二月二〇日のことである<sup>(7)</sup>。

設立と同時に理事長孫科と八名の常務理事、二十九名の理事が選出され、館の活動はその指導下に行われた。常務理事會は數回の會合の後、業務の各部門とその責任者を次のように決定している。

祕書主任 葉恭綽

胡風と『時事類編』(千野)

財務理事 葉恭綽 黎照寰

事務部 主任 李大超 副主任 李庚

研究部 主任 黎照寰 副主任 劉大鈞

出版部 主任 史量才 副主任 陳彬龢<sup>(9)</sup>

館の職員は理事を含め總勢五十八名<sup>(10)</sup>、その他に若干の外部から招聘された研究員、調査團員を含めて各業務は進められた。その主な内容は次のようなものである<sup>(11)</sup>。

① 學術研究(孫中山思想の研究ならびに中國に關する、また現代において重要な各種問題の共同研究とその補助)

② 實地調査(調査隊を各地に派遣し、農村の社會・經濟・

教育狀況を調査する<sup>(12)</sup>)

③ 學術獎勵金の支給<sup>(13)</sup>

④ 獎學金(學生向け)の支給<sup>(13)</sup>

⑤ 學術講座(一般市民向け)の開設

⑥ 圖書・定期刊行物の出版

⑦ 研究所・圖書館・博物館の設置

以上の各業務は三三年六月二十五日の常務理事會で計畫・豫算が承認され、工作が開始されたが、これらは館の南京移轉後はもちろん、抗日戦開始後も、武漢さらには重慶郊外北碚へと所を移して四二年まで繼續された。

ところで問題の『時事類編』であるが、その編集を擔當していたのはもちろん出版部である。この部の工作は、具體的には次の各雑誌を發行することであつた。

『時事類編』——旬刊のち半月刊。五卷十五期まで發行（一卷は十四期、二卷は二十八期、三・四卷は二十二期まで。一九三三年八月〜一九三七年八月）。上海で創刊され、三五年二月中山文化教育館の移轉とともに南京へ移る。抗日戦勃發後は『時事類編特刊』（月刊）として七十期まで發行（一九三七年九月〜四二年一月）。發行地は三七年十二月（六期）からは漢口、三八年三月（十八期）からは重慶へと移つた。政治經濟を中心に、時事に即したテーマの論文を外國誌より譯載した。詳しくは後述。

『中山文化教育館季刊』——四卷三期まで發行（一九三四年八月〜三七年四月）。上海で創刊、三五年より南京へ移る。政治經濟から文學藝術に至るまで幅広い分野の各種論文二十編あまりを掲載した大型誌。

『期刊索引』——月刊。八卷四期まで發行（六期で二卷。一九三三年十一月〜三七年八月）。上海で創刊、三五年二月から南京へ移る。各月の定期刊行物の記事索引。

『日報索引月刊』——七卷三期まで發行（一九三四年五月〜

七年八月）。各種新聞の記事索引。

『天下』——月刊。英文誌。未詳。

他の各誌がすべて抗日戦争の開始とともに停刊されたのに對し、『時事類編』がその後も延々と四二年まで發行され續けていることを見れば、この雑誌が出版部の活動の中心的な位置を占めていたことが窺えよう。そして確かにそう言うに相應しく、胡風のほか『申報・婦女園地』の主編だった沈荪九や、すでに有名人だった胡愈之、まだ新人だった雜文家の徐懋庸などがこの雑誌に執筆しているのである。

では、そのような雑誌の編集を可能にした出版部の内部はどうなっていたのか。そしてその出版部の下で『時事類編』はどのような形で運営されていたのだろうか。まず出版部の狀況から見てみることにしよう。

## 二 出版部をめぐる人々

出版部は、すでに述べたように主任史量才、副主任陳彬龢の下で工作が行われていた。だが、實際には誰がその活動を掌握し、上層部とはどのように繋がっていたのだろうか。そうした内情について、三四年の途中から『時事類編』の翻譯者に加わり、胡風がその職を辭める引き金となった言動をし

た韓侍桁が、次のような興味ある回憶を残している。

中山文化教育館はもともと孫科が王崑崙を派遣して運営していた。王崑崙は陳彬龢に一つの班をやらせていた。

沈茲九、胡風らはみんなそこにいた。<sup>16)</sup>

この證言から、出版部における陳彬龢の仕事ぶりを窺うことができる。ここでいう彼がやっていた「班」とは、胡風・沈茲九ら『時事類編』の翻譯者たちが「みんなそこにいた」というのだから、出版部のことに他ならない。

その陳彬龢については、胡風も次のように證言を残している。

この頃、孫科が出資した中山文化教育館が設立された。

陳彬龢が出版部の主任に當たり、『時事類編』を出版した……(陳は當時「民權保障同盟」の活動家でもあり、左傾記者でもあった)。韓起(胡風が歸國後身を寄せていた友人——引用者)の友人楊幸之(湖南の人)はここで秘書をしており、陳の文章はほとんど彼が書いたものだった。その楊幸之が韓起を通じてわたしを中山文化教育館に引っぱり、『時事類編』の翻譯をさせたのである。<sup>17)</sup>

陳彬龢は実際には出版部副主任だったので、彼に關する二人の認識は誤っているのだが、逆にこの誤認は、出版部の工作

を實際には陳彬龢が掌握し、傍目には主任と映るような形で采配を振っていたことを示唆している。

また先の韓侍桁の證言は、上層部との繋がりについても興味深い情報を提供している。孫科は王崑崙を通じて中山文化教育館を指導し、王崑崙は陳彬龢を通じて出版部を掌握していたと言っているのである。

確かに當時の状況を考えれば、孫科自身に中山文化教育館を精力的に指導するだけの條件がなかったのは事實である。

三一年十一月の國民黨四全大會(この大會で孫科ら廣東派と南京派の國民政府の連合がなつた)で行政院長に就任しながら、蔣介石派のサポータージュによって着任後一ヶ月で下野を餘儀なくされた孫科は、再び蔣介石との和解がなつて、三二年十二月から立法院長に返り咲いていた。この時期孫科には、立憲の總責任者として憲法起草することが最大の任務であった。そんな彼が、首都から離れていた中山文化教育館の工作に自ら深く關與する餘裕はなかつたはずなのである。

一方王崑崙は、孫科の立法院長存在中の三五年立法院委員となり、抗日戦開始後は重慶で、孫科が會長をしていた「中蘇文化協會」の實務を掌握した人物で、孫科とは密接な關係にあった。そして『中國政黨辭典』(宋春ほか編 吉林人民出版社

社 一九八八年一月)、『中國革命和建設歷史時期人物事典(一)』(鄭福林編著 吉林人民出版社 一九八八年五月)によれば王崑崙は中山文化教育館の總幹事であったという。(18)しかしその在職期間は明らかにされておらず、また筆者の調べた限りでは、館の創立當初組織の中に總幹事という職稱は見當らない。

上記のような人脈、證言、資料から考えて、王崑崙が孫科の腹心として、彼と中山文化教育館の橋渡しをしていたのは事實であろう。だが、王が各工作の實務にも采配を振っていたかどうか(とりわけ出版部の工作について)は疑問である。

出版部主任の史量才は周知のとおり申報館の社主であった。そして『昭和八年版 外國に於ける新聞(上卷)』(外務省情報部編 一九三三年)によれば、當時陳彬龢は史量才の信任厚い「申報館」の副總主筆であり、實際には總主筆に代わって實務を取り仕切っていたのである。(19)

また陳彬龢の祕書であり、胡風を中山文化教育館へ引っぱったという楊幸之は、『申報年鑑』の編集をしており、三三年一月「申報・自由談」の主編黎烈文が妻の病逝で二週間編集を休んだ時、彼に代わって編集をした人物でもある。さらに胡風『自傳』によれば、創刊當初『時事類編』の主編であったという羅又玄も、「申報館」の副主筆兼經濟部長であつた。

(21)た。

つまり中山文化教育館の創立當初、出版部の工作は、實質上申報館によって擔われていたのである。こうした事實は、少なくとも同部においては、王崑崙より史量才の影響が大きかったことを物語っている。(22)史量才が申報館を動員して工作を引き受け、實務は信賴していた陳彬龢に任せていたのである。

だが申報館による出版部の運営がいつまでも續いたわけではない。韓待桁によれば、

……孫科に王崑崙は頼りにならないという人がおり、鍾天心と左恭が(出版部の工作を——引用者)擔當することに改められた。(23)鍾は名前を連ねただけで、實際には左が責を負った。左は着任後『中山文化教育館季刊』を創刊した。(『回憶』)

と云うのである。定職のなかった韓待桁は、この時左恭に誘われて同時に中山文化教育館での仕事を始めたという。左恭らが出版部の工作を繼いだことは、胡風も『自傳』で同様

……孫科は鍾天心を派遣して陳彬龢の出版部主任を繼がせた。一緒に來た者に左恭(のちに馮雪峰が祕密の共產

黨員だと教えてくれた<sup>(24)</sup>と韓侍桁がいた。

と述べているので事實であつたらう。その時期は『中山文化教育館季刊』の創刊の日時（一九三四年八月十五日）から考え、同年の七、八月頃だったはずである。

この後も陳彬龢は同館にいたようだが、<sup>(25)</sup>出版部への彼と申報館の影響は低下したと思われる。そうした趨勢に同年十一月の史量才暗殺は決定的な意味を持ったに違いない。この事件によって本社自體が存立の危機に立たされた申報館に、出版部の工作をきり回す餘裕はなかつたはずなのである。陳彬龢の學生時代からの友人胡山源によれば、陳彬龢もこの事件の後申報館を去つたといふ<sup>(26)</sup>。

だが注意しておかなければならないが、左恭らの着任後、申報館の影響が弱まつたといつても、各誌の編集姿勢が悪化したというわけではない。

例えば『時事類編』は雑誌を一旦休刊し（三四年八月）、同年九月二十五日發行の次號（二卷二十二期）から誌面を一新するが、胡愈之の連載が始まり、文藝作品の紹介も増えるなど、むしろこれ以後雑誌は精彩を増している。徐懋庸が同誌に執筆したのもこの時期である。

だが、それにもかかわらず申報館が出版部を掌握していた

胡風と『時事類編』（千野）

ことは、大きな意味を持つていたと言わねばならない。當時社主の史量才は文化事業に廣く手を染め、民權保障同盟を積極的に支援するなど、比較的リベラルな財界人として有名だった。その彼が支えていればこそ、友人からの紹介だったとはいえ、胡風も抵抗なく『時事類編』の仕事にはいられたに違いない。しかも以上みたように、その組織は國民黨の援助はあつたにしても、黨とは切り離された文化教育團體なのである。さらに胡風によれば、中山文化教育館に勤めるに當つては左連の指導部に報告がなされ、

わたしがこうした狀況（同館の内情とそこにスカウトされたいきさつ）——引用者）を報告すると、茅盾、周揚たち（當時

の行政書記、組織部長——引用者）は行くように主張した。<sup>(27)</sup>『自傳』

と云う。だとすれば中山文化教育館での仕事をもつて國民黨との關係が噂され、それによって左連の指導部を辞任させられたのは、胡風にしてみればまさに故ないことであつたに違いない。

胡風が中山文化教育館の職を辞したのは、三四年十一月のことである<sup>(28)</sup>。そして翌三五年二月中山文化教育館は南京へ移轉し、多くのメンバーが入れ替わつた。胡風と親交のあつた

沈玆九、張仲實も同館を辭し、胡愈之も關係を斷つた。それと同時に申報館の同館出版部への影響も跡を斷つことになる。

### 三 胡風についての『時事類編』

では『時事類編』は具體的にはどんな内容の雑誌であり、胡風はそこでどんな仕事をしたのだろうか。そしてそれは胡風にとってどんな意味があったのだろうか。これまでに述べたところと重複する部分もあるが、胡風在職中の變遷も含めて見てみることにしよう。

『時事類編』は一九三三年八月十日の創刊。當初は旬刊であった。胡風は創刊號からすでに二篇の翻譯を掲載しており、遅くとも七月中には仕事を開始していたと思われる。出版部を含めた中山文化教育館の各工作計畫が承認され、豫算が下りるのが同年六月二十五日だから、まさに創刊の準備が始まった頃から参加していたことになる。

同誌の編集は中山文化教育館としか記されていないが、胡風によれば編集長は羅又玄。每號約六十ページで、各十篇あまりの論文を掲載し、その内容は「一、各國の著名な雑誌から政治、經濟、文化教育の重要な著述を選んで翻譯する。二、世界の現在の重要な各種統計を収集する。三、外國人の

わが國の政治、經濟、文化教育および社會問題に關する觀察と批評を紹介する。」(各號「編集凡例」というものであった。

翻譯は英、佛、獨、露、日の各國語の雑誌からなされたが、各言語について數名ずつの固定した翻譯者を抱えていたようで、胡風はその一人であった。翻譯陣の主なメンバーは次のとおりである。<sup>(29)</sup>

英語 陳漱生、<sup>(30)</sup>陳問路、馬潤庠、嚴鴻瑤、王顯廷、

徐卓英、韓侍桁

フランス語 李萬居、<sup>(33)</sup>陳逸凡

ドイツ語 潘惠田<sup>\*</sup>

ロシア語 張仲實、<sup>(34)</sup>吳清友、樊英

日本語 胡風、力生、沈玆九<sup>(35)</sup>

このうち李萬居、馬潤庠、潘惠田は館の南京移轉後も残り、編集者に名を連ねている。その時の編集長は鍾天心である(『時事類編』三卷十六期奥付)。

また各翻譯は胡風の譯文から推測するに、全譯であったと思われる。少なくとも胡風の翻譯はそうなっている。

胡風の翻譯はほとんどが政治經濟關係の時事論文で(末尾に付した「目錄」を参照されたい)、<sup>(36)</sup>その選擇もすべてが自分によるわけではなかったらしい。しかし中には當時の



世界の危機的状況に警鐘を鳴らす論旨の文章も相當數見られるし、在日中關係があつたプロレタリア科學研究所發行の『プロレタリア科學』『讀書』や、『文化集團』『唯物論研究』など左翼系の雑誌からの翻譯も含まれている。これらの論文は胡風自らが選んだものであつたらう。そしてこうした選擇から、當時の彼の讀書傾向と、また明確な形は持つていなかったにしても、それを通じて彼がどのような方向に思考を向けてつあつたかの一端は窺えるのである。

しかも翻譯された論文はいずれもかなりの長篇であり、原載誌からの翻譯期間の短さとその掲載の頻度を考えれば、胡風はかなりのスピードで精力的に翻譯を進めていたことがわかる。彼の讀書と吸収は量的にも、速度的にもきわめて大きかつたわけである。

そうしたこともあつてか、胡風の譯文は逐語譯に近い直譯體になつてゐる。しかも、彼の後年の文藝批評は獨特な文體を持つてゐるが、その特徴はすでにこれら譯文にも顯著である。例えば日本の用語をそのまま導入したような言い回しや、「——的」を多用するのがその一つである。また胡風獨特の、構造助詞における「的」と「底」の使い分けも、注39に示した中野正剛論文の翻譯あたりからはつきりしてい

る。そしてそれは元を正せば、原文の日本語が「の」となつてゐる場合は「底」、それ以外の場合は「的」という區別なのである。こうしたことは、胡風独自の文體が、これら日本語からの翻譯によつて培われたことを物語つていよう。<sup>(37)</sup>

さて先に述べたような『時事類編』の編集體制は翌三四年夏まで續いたが、八月十五日發行の二卷二十一期に「ここに……一週年記念特大號を發行した後一ヶ月休刊し、九月十日より繼續出版することとした。それとともに休刊中、一意専心本誌内容の改革と充實を計る豫定である。」との「本刊啓事」が掲げられ、大幅な改組がなされることになつた。左恭らが出版部に派遣されてきた直後のことである。彼が『中山文化教育館季刊』を創刊し、自ら編集したことを考えれば、同誌の改革もこうした人の動きと無縁ではなかつたらう。

實際には九月二十五日發行となつた翌二十二期から『時事類編』の誌面は一新され、毎號百ページあまり、論文數も十五篇前後へと増加、「世界論壇」「學術論著」「時事漫畫」「人物評傳」「文藝」の各欄に分けて掲載されることになつた。政治經濟だけでなく文化面が強化され、より多彩な内容になつたわけである。中でも目玉は月一回胡愈之が前月の世界の動向を解説する欄「×月の世界政治」が設けられたことだつ

た。そのことは二十二期の「編後記」で「特に胡愈之先生に長期的に受け持っていただくことにした」と述べていることから窺える（實際には館の南京移轉とともにわずかず三回の連載で中斷したが）。

胡愈之が『時事類編』の執筆に加わったことは、實は大きな意味を持っている。彼が鄒韜奮を通じて生活書店と深い關係にあったことはよく知られているが、胡風の友人張仲實は三五年二月中山文化教育館退職とともに胡愈之の紹介で生活書店入りし、編集者となったのである。

そして三六年胡風に最初の書き下ろしの評論『文學與生活』の執筆を依頼し、編集を引き受けて同社から出版したのも張仲實だったのである。（のちの胡愈之夫人沈茲九も同館退職後生活書店發行の雑誌『婦女生活』の主編をしている。これに胡愈之が關與していたかどうかは不明だが、二人が初めて出會ったのは案外中山文化教育館であつたかもしれない。）

胡風は中山文化教育館を辭した後文筆活動に専念することになったが、彼の文壇登場には多くの人物が關わっている。中でも魯迅と黃源の存在は忘れることができない。だが張仲實との關係のように『時事類編』で生まれた人の輪も、これに寄與していたのである。胡愈之が『時事類編』に加わらな

ければ、そして張仲實が胡愈之と巡り合い、胡風と相い知ることがなければ、情況はもう少し違ったものになつていたかもしれない。

胡風と張仲實は、胡風の文藝理論の發展を考へる上でも因縁があつた。張仲實は『時事類編』二卷二十一〜二期にソ連文學顧問會の「給初學寫作者的一封信」を、三卷四期にフアジェエフの「我的創作經驗」を翻譯し、これらはのち一冊の單行本にまとめられたが、胡風はこの本の書評を書き「形象的思索」について紹介したのである。

張仲實が翻譯した文章は、社會主義リアリズムの提唱を受けて、あるべき創作方法について具體例を挙げ解説したもので、文中「政治的雜音」に満ちたスローガン作品や「議論を表現の代わりにし」たような哲理小説を批判し、「文藝作品は……理智だけでなく、感情にも基づいている」のだとしていた。これに對し胡風は——創作の過程で、作者の思想や觀念は表現しようとする對象との間に化學的融合作用を及ぼしあい、對象から強加されたり訂正を受けたりして深められていく。そのようにして表現された形象こそが活きた形象であり、そのような思考（＝形象的思索）こそが藝術家の本領である、と概括したのである。

この段階では、胡風はこの概念を單に作者というものが備えていた能力の一つとして捉えていたにすぎない。しかしこれは胡風にとって重要な問題であったと見え、長い期間をかけて醗酵され、抗日戦中に胡風のリアリズム論の中心的概念の一つ「形象的思惟」へと發展していくことになる。胡風は當然『時事類編』で張仲實の翻譯を目にしていただろう。その意味では、胡風文藝理論の一端は彼が『時事類編』にいた時期に胚胎していたのである。

以上見てきたような諸事實は、文藝批評家胡風のある部分の確かに時事類編での活動と、同誌を巡る人々の中で育まれたことを物語っているだろう。『時事類編』においてわれわれが見ることができるのは、搖籃期の左翼文學青年の姿なのである。

だが彼が獨りで歩き出すには大きな試鍊がつきまとった。當時の苦しかった生活について胡風は次のように語っている。

わたしは中山文化教育館の日文翻譯者となり、毎號『時事類編』に一、二篇の文章を譯した。わたしは半日だけ出勤することを提案し、彼ら（陳彬龢ら——引用者）も承諾した。だがわたしの月給は翻譯人員の中では最も少な

胡風と『時事類編』（千野）

く、わずか百元であった。（『自傳』）

實際には、日本から歸ったばかりの無名の青年（當時三十一歳）には、これは悪い條件の仕事ではなかったろう。何より他に生活の糧はなかったのだ。しかも毎日半日の出勤でよかったし、日本語ができ文學を志していた彼の能力と指向がある程度満たしてくれる仕事である。だからむしろこの言葉には、胡風の自分の能力への自負がこめられていると言えさだろう。そしてその言葉どおり、彼は驚くべきほど精力的に翻譯をこなしたし、左連の宣傳部長、行政書記としての工作にも精を出したのである。

この年（三三年）の十二月胡風は梅志と結婚し、翌月には夫人が身籠った。いわゆるおめでたである。しかし彼は、

わたしは生活が續けられなくなり（經濟的にも、時間と精力の面でも）、われわれの工作に影響を與えると思ひ、彼女に墮胎させた（『自傳』）

のである。しかもこの時彼は最初に藥を使って失敗し、次に魯迅紹介の日本人病院で手術をするがこれにも失敗し、翌々日再手術をしている。そのあり様はあまりに残酷で、胡風にも見ていられなかったほどだったという。幸福と言うには程遠い情況だったのである。

左連の工作、新婚の家庭、それらを支えるための『時事類編』の仕事、そして妻の妊娠と中絶。おそらくこの時期胡風は必死だったに違いない。そんな厳しい情況の中で、彼は文藝批評家としての自分を胚胎させていったわけである。

そう思えば、彼を信頼し庇護してくれた魯迅が彼にとつてどんな存在であったか。そして彼にしてみれば故ない噂を冷淡に黙認し、左連指導部の辭任へと追いこんだ周揚らに、彼がどんな感情を抱いたか、解るような氣がするのである。

## 【注釋】

- (1) 本稿は、(A)「歸國後の胡風(その1)——左連における胡風と周揚の關係をめぐって——」(『人文學報』一九八號 東京立大學人文學部 一九八八年三月)、(B)「二つの資料——胡風歸國の日時および穆木天の轉向について——」(『法政大學教養部「紀要」人文科學編」第七十號 一九八九年一月)に續く、「歸國後の胡風(その3)」にあたるものである。
- (2) 胡風歸國の時期は從來彼自身の發言に基づいて一九三三年七月初めとされてきたが、實際には同年六月十五日である。詳しくは前稿(B)参照。
- (3) 中山文化教育館章程第二章總則第二條。(『第一回教育年鑑』一九三四年 出版社不明による)
- (4) 孫科「八十述略」(『傳記文學』二十三卷五期 傳記文學出版社 一九七三年十一月)

版社 一九七三年十一月)

- (5) 同案には「中央は年來黨義教育を勵行し」たが「その結果を綜合するに、成功を収めがたきのみならず、却つて一般學生をして三民主義の空虚・乾燥・無意識を感ぜしめてゐる。」「そこで黨義教育實施方法を改進し」、「黨義を各種社會科學中に浸透させようとするのである。」「學校における黨義教育だけでなく、社會教育及び文藝にも、同様に浸透させる必要がある。如何にして多數の三民主義的社會科學書籍及び三民主義的文藝書籍を編制するか? それには専門研究の學者がなければ不可である。中央は、事實の需要に依り、期を定めて大規模の三民主義研究院を創辦して人材を培植するであらう。」(波多野乾一『國民黨通史』による)と記されており、その現状認識も、官民の違いを除けば學術組織設置の目的も、孫科が「八十述略」で述べているところと相通する。しかもすでに見たように、これは中山文化教育館の總則にそっくり受けつがれている。

- (6) 『申報』一九三三年三月十二日「教育消息」欄
- (7) 『申報』一九三五年三月一日「教育消息」欄
- (8) 常務理事は、蔡元培、戴傳賢、吳鐵城、葉恭綽、史量才、鄭洪年、孔祥熙、黎照寰の八名。理事は理事長孫科と常務理事のほか林森、蔣介石、汪兆銘、胡漢民、于右任、吳敬恒、張人傑、張繼、宋子文、李石曾、居正、陳果夫、伍朝樞、顧孟餘、楊庶堪、張定璠、王雲五、薛篤弼、馬超俊、朱家驊、

- の二十九名。(『申報』一九三三年三月十三日「教育消息」欄)
- (9) 『申報』一九三三年四月五日「教育消息」欄
- (10) 『全國文化機關一覽』中國出版社(臺北)一九七三年(一九三四年刊の影印版)
- (11) 『第一回教育年鑑』(一九三四年)による。
- (12) 安徽・江西・湖南・湖北・廣東の各省に調査團を派遣している。(『全國文化機關一覽』)
- (13) 學術獎勵金・獎學金については『申報』一九三三年六月二十九日「教育消息」欄で、その支給およびそのための諸規則が發表され、同年から實施された。
- (14) 研究所については『申報』一九三三年六月二十五日「教育消息」欄によれば、陳正讓ら二名が研究員として招聘されている。
- (15) 圖書館については、全國の各機關・書店に書籍が請求され、これに應じて民智書局、兒童書局などが自社の出版物をすべて寄贈、個人でも作家の費哲民が藏書數千冊を寄贈するなどして、蒐書が進められた。(『申報』一九三三年四月十六日および二十三日「教育消息」欄)
- (16) 韓侍桁「我的經歷與交往」(『新文學史料』一九八七年三期——以下韓侍桁「回憶」と略す)
- (17) 胡風「回憶參加左聯前後(一)」(『新文學史料』一九八四年三期——以下胡風「自傳」と略す)この證言は他にもいくつか誤りがある。中山文化教育館に孫科が出資しているのは事實

胡風と『時事類編』(千野)

だが、財故の基盤は補助金にあった。また『時事類編』は創刊當初旬刊であった。以上はすでに本文中で觸れたところである。

(18) また上記二資料によれば、驚くべきことに王崑崙は一九三三年以來共產黨員だったという。

(19) 同書は陳彬蘇について「前總主筆なるが昨夏蔣介石に對する筆禍事件より一時退社せるも社長史量才の信任厚く最近再び副總主筆に返り咲き得意の日本及露國關係社説に筆を執り居れり」と述べ、總主筆張蘊和についての解説中でも「……實際は陳彬蘇に於て實務を執り居れり」と記している。陳彬蘇は一九三一年春黃炎培の紹介で申報館入りし、史量才の推薦で副總主筆になったらしい。蔣介石に對する筆禍事件とは、三二年春、社論『募集與國公債』『剿匪與造匪』を書いて、公債を内戦の費用に當てること、國民黨の反共圍剿政策などを批判したことを言う。陳彬蘇は三二年創刊の『生活日報』でも編輯部副主任(主任戈公振)をしていた。

ここで注意しておかねばならないことがある。以上に述べた内容や胡風「自傳」の「活動家である左傾記者」という記述から見れば、陳彬蘇が中心的な役割を果たしていたかのようだが、實際には史量才あつての彼で、史量才の信頼が厚かつたため仕事を任されていたにすぎない。事實史量才の暗殺後、彼は申報館を辭職している(後述)。その人物も實像はかなりいい加減だったらしく、社論や著書のはほとんどは他人に

書かせた文章を自分名義で発表したものだという。また申報館在職當時から日本總領事館の特務工作員と親交があり、辭職後上海、香港で出版社を興したり、新聞の發行に携わったが、抗日戰開始後は日本人の接收した申報館の社長に就任し、御用文化人となった。戰後その罪で漢奸として告發され日本へ逃亡したが、晩年は不遇で一九七〇年八月日本の精神病院で狂死したと伝えられる。(敵偽劫奪時期的申報『新聞研究資料』第二十二輯所收)による)

(20) 『魯迅全集』第十五卷「日記」人物注釋の項(一九八一年人民文學出版社)

(21) 『昭和八年版 外國に於ける新聞(上卷)』同書は羅又玄について「早稻田、中央、帝大等に在學したることあり清華學校及北京大學卒業「穗」又は「晦」の號にて社論執筆」と述べている。

(22) 『申報』一九三三年四月五日「教育消息」欄によれば、四日の常務理事會で、實地調査團の進行については申報館と合作し、史量才を計畫ならびに起草の責任者とすることを決定している。こうしたことも、史量才と申報館が中山文化教育館と深く関わっていたことを示している。

(23) 鍾天心は當時立法院委員、やはり孫科に近い人物である(孫科『八十述略』)。また左恭は中央黨部圖書館主任兼『文藝月刊』編委會主任、同じく孫科一派であった(韓侍桁『回憶』)。なお、韓侍桁によれば左恭は一九〇六年生れ。丁玲と

同じ時期に北京大學で聽講したことがあるという。左恭は韓侍桁の南開中學時代以來の友人であった繆崇群と南京で親しくなり(繆は南京で教職に就いていた)、彼を通じて韓侍桁と知り合った。以後二人は抗日戰中も一貫して親交を結んでいる。(韓侍桁『回憶』)

(24) 左恭が秘密共產黨員であったことは事實のようだ。三五年十一月國民黨側からいくつかのルートで國共合作が摸索された時、國民黨の諷小岑の相談に應じて上海の黨組織と連絡を取り、工作員として張子華を紹介したのは左恭であったという。(李坤「第二次國共合作形成的歷史過程」『抗日民族統一戰線與第二次國共合作』所收 中國文史出版社 一九八七年)

(25) 三四年九月十八日、陳彬蘇は九・一八事變を記念して(國恥紀念)中山文化教育館で「東北失地痛史」と題する講演を行っているので、この時期まで同館にいたことは確かである。

(26) 「我所知道的陳彬蘇」(『人物』一九八五年五期)

(27) ただし茅盾は回憶で「あれは一九三四年のこと、わたしは陳望道と鄭振鐸から……胡風が孫科のやっていた「中山文化教育館」で手當てをもらっている、毎月百元だ、と知った。……胡風がどういう關係を通じてはいつたのかわたしは知らないが、彼はこのことをわれわれすべてに秘密にしており、疑いを抱かせた。」(『我走過的道路』(中) 人民文學出版社)

一九八四年」と述べ、胡風の報告があったことを否定している。ことの當否は知るすべもないが、少なくとも胡風と茅盾の間に深い懸隔があったことは察せられる。

- (28) 胡風『自傳』によれば、中山文化教育館辭職は三四年十月末。この事件は胡風の左連行政書記辭任と連動しており、夏衍『懶尋舊夢錄』(三聯書店 一九八五年)によれば、その辭任と前後して行われた魯迅と周揚ら文委グループの會見(ここで田漢が「胡風は國民黨のスパイだ」と發言したと言われる)が同年十月末く十一月初だったというから、これも胡風の中山文化教育館辭職が同じ頃だったことを示唆している。また『時事類編』掲載の胡風の譯文を見ても、三四年十月初旬出版の雑誌からの翻譯を最後に、後は途絶えている。これも中山文化教育館の辭任が同じ時期だったことを示している。

(29) 以下\*を付した人物は創刊號よりのメンバーと思われる者。

- (30) 女性。胡風『自傳』によれば共產黨員だったらしい。  
 (31) 胡風『自傳』によれば英文秘書を兼ねていた。  
 (32) 韓侍桁が『時事類編』に執筆しはじめるのは二卷二十二期(三四年九月二十五日)すなわち雑誌改組の號からである。  
 (33) 臺灣の人。一九〇二〜六六年。中國青年黨員で、戦後は臺灣「新生報」社長。臺灣で中國民主黨を興し、民主化運動に寄與した。

胡風と『時事類編』(千野)

- (34) 陝西省の人。一九〇五。共產黨員。二六年上海大學に學び、同大學のモスクワ派遣留學生となって東方大學・中山大學に留學。歸國後神州國光社の校正係をへて中山文化教育館に轉じた。三五年二月同館の南京移轉に伴い、胡愈之の紹介で生活書店の編集者となり『世界知識』を編集。のち同書店の總編集。多くのマルクス主義哲學・經濟學の譯書がある。抗戦中は四三年より黨中央宣傳部出版科副科長、解放後は五四年より中央編譯局副局長。中山文化教育館在職時から胡風と交流があった。(張仲實「我的編譯生活」『出版史料』<sup>2</sup> 學林出版社 一九八三年十二月)

(35) のちの胡愈之夫人。當時は『申報副刊・婦女園地』の編集者。館の南京移轉とともに生活書店にはいり、『婦女生活』(三五年七月〜四一年一月)の編集長となる。

(36) 例えば、民政黨・政友會の弱腰の政策を批判し、その路線に沿う學國一致の呼びかけには應じられないと述べた、中野正剛「國策協定を検討す」の翻譯(『時事類編』一卷十期)は陳彬蘇の指定だったという(『自傳』)。しかし胡風はこの翻譯の付記に、「彼は強硬派を装っているが、實は軍部方面に媚を賣っているに過ぎない。」と批判をつけ加えている。

(37) 胡風譯文がどれくらい直譯體であるか、またそこに「——」の多用や「的」「底」の使い分けなどの胡風的特徴がいかに現れているかについては、次の原文と譯文を比べてみるだけで明らかだろう。

「しかも「進言」された言論の自由が何を意味するかは明瞭だ。それは要するに、ファシスト・グループの政策、行動に

對する既成政黨的、ブルジョア的、三井三菱の批判の自由ということに外ならない。(永田廣志「現代自由主義の批判」)  
その胡風譯文は次のとおり。

「而且、「諫議」所要求的言論自由底内容所指的是什麼是很明瞭的。要之、這不外是既成政黨的、布爾喬亞的三菱、三井對於法西斯群底政策、行動之批判的自由而已。」(現代自由主義的批判)『時事類編』二卷六期)

(38) 胡風の「形象的思维」といふ概念は、當時マルクス主義文藝理論の一環として盛行していた「形象化」論への批判として提出された。その要諦は——「形象化」が抽象的な思想や感情を具體的な事物の上に活き活きと表現するという論であるのに對し、それでは結局のところ作者の主觀を客觀的事物の上に投影しているにすぎず、その表現は現實から遊離した抽象的概念でしかない。思想や感情そのものが具體的な事物と繋がり、内容をもったもの(＝形象的思维)であつてこそ、活き活きとした表現を生み出すことができる。すなわち「形象化」は觀念論であるのに對し、「形象的思维」は現實主義的の觀念である、とする點にある。なお「形象的思维」については、その來歴を胡風自身が「『形象的思维』觀點的提出和發展」(『藝譯』一九八四年三期)で詳しく述べている。

### 『時事類編』所載の胡風翻譯目錄

胡風が『時事類編』に發表した翻譯についてはすでに「胡風著譯 數年目錄(上)」(趙全龍・吳曉明編『中國現代文學研究叢刊』一九八

五年三期)に記載がある。ただ同目錄は遺漏や誤りが多く、『時事類編』掲載も例外ではない。また當然のことながら、これら翻譯については日本の原載誌との照合はなされていない。そこで筆者の調査した資料をつけ加えて新たに胡風の『時事類編』所載の翻譯目錄を作製し、ここに付すことにした。なお胡風の著作・翻譯の全體像については現在目錄を作製中である。

#### (凡例)

- 一、この目錄には上から順に、翻譯が掲載された『時事類編』の卷號、その刊行年月日、翻譯の題名、署名、付記の有無、原文の掲載誌および卷號、その刊行年月日、原文の題名、執筆者名を記した。
- 二、『時事類編』の卷號は、ローマ數字で卷數を、算用數字で號數を示した。(例：I—1は一卷一號を指す)
- 三、刊行年月日は『時事類編』・原載誌とも年(西曆の下二ケタ)・月・日の順に示した。(例：33・8・10は一九三三年八月十日を指す)
- 四、刊行期日はほとんどの場合奥付けの記載とほぼ一致しているのに、これによって記し、異なる場合は注を付して末尾に示した。
- 五、翻譯の冒頭に譯者の付記がある場合は、付記の欄に○を付した。この付記は譯文の簡単な梗概であることが多いが、中には譯者(胡風)のコメントを含むものもある。
- 六、原載誌の卷號についてはその雜誌でよく使われていた呼稱を採用し、あえて統一は計らなかつた。
- 七、その他若干の説明を要すると思われる箇所には注を付し、末尾にまとめて記した。



卷・號	刊行年月日	題名	署名付記	原載誌	刊行年月日	題名	執筆著者
I-1	33・8・10	世界經濟會議呢? 「不」經濟會議呢?	果	外交時報686號	33・7・1	世界經濟會議か「不」經濟會議か	林 要
I-1	33・8・10	明年度の日本豫算 — 増稅與赤字公債 —	果	國際評論2卷7號	33・7・1	明年度豫算を繞る増稅と赤字公債	笹原 正志
I-2	33・8・21	現世界的日英經濟戰	果	改造15卷8號	33・8・1* <sup>①</sup>	世界に於ける日英經濟戰	高木友三郎
I-2	33・8・21	蘇維埃聯邦遠東政策底轉變	果	中央公論第48年8月號	33・8・1* <sup>①</sup>	ソヴェート聯邦極東政策の方向	岡田 宗司
I-3	33・9・1	從貿易上看到的日美關係	果	外交時報688號	33・8・1	貿易上より見たる日米關係	松岡 正男
I-3	33・9・1	蘇維埃聯邦遠東政策底轉變(續)	果	中央公論第48年8月號	33・8・1* <sup>①</sup>	ソヴェート聯邦極東政策の方向 轉換	岡田 宗司
I-4	33・9・11	國際石油戰線的展望	果	外交時報688號	33・8・1	國際石油戰線の展望	水飼幸之助
I-5	33・9・21	國際石油戰線の展望(續)	果	外交時報688號	33・8・1	國際石油戰線の展望	水飼幸之助
I-6	33・10・1	日英經濟戰的尖銳化 誇耀於世界產業界的日本紡紗業之威力	果	世界知識5卷3號	33・9・1	日英新經濟戰線の展望 二、世界に誇る日本紡績業の威力	深澤甲子男
I-6	33・10・1	美國陸軍の現狀	果	未詳 <sup>②</sup>	33・8月	未詳	佐藤 賢了
I-7	33・10・11	廣田外長就任の原委	果	中央公論第48年10月號	33・10・1*	廣田外相就任の顛末	野村 秀雄
I-8	33・10・21	從國防上所看到的日本海交通	果	外交時報691號	33・9・15	國防より見たる日本海の交通	關根 郡平
I-10	33・11・11	對於日本國策協定の檢討	果	經濟往來8卷11號	33・10・1	國策協定を檢討す	中野 正剛
I-11	33・11・21	蘇聯領袖對於蘇聯國防的意見	果	未詳 <sup>③</sup>	33・11月	未詳	署名なし
I-12	33・12・1	一九三六年の戰略論 — 以和蘇聯的關連爲主 —	張果 <sup>④</sup>	改造15卷11號	33・11・1*	一九三六年戰略論 — 主としてソヴェート聯邦に關連して —	平田 晉策
I-13	33・12・11	五長會議底結束與政局	張果	ダイヤモンド21卷33號	33・11・1	經濟界の動向 五相會議の結束と政局	署名なし

卷・號	刊行年月日	題名	署名付記	原載誌	刊行年月日	題名	執筆著者
II   13	34 · 5 · 11	日滿貿易の現状	張果 ○	未詳 <sup>①</sup> 改造15卷11號	33 · 9月	未詳	署名なし
II   14	33 · 12 · 21	日本金融資本底特殊性	張果 ○	國際知識33年12月號	33 · 11 · 1*	我國金融資本の特殊性	佐多 忠隆
II   1	34 · 1 · 1	和平の準備	張果 ○	プロレタリア科學5卷9號	33 · 12 · 1	和平の準備	横田喜三郎
II   1	34 · 1 · 1	日本主義哲學の批判	張果 ○	經濟往來9卷1號	33 · 10 · 28	日本主義哲學の批判	廣瀬進一郎
II   2	34 · 1 · 21	日本一九三四年度の豫算批判	張果 ○	ダイヤモンド昭和9年1月號	34 · 1 · 1	日本主義哲學の正體——紀平正義哲學の正體——	阿部 賢一
II   3	34 · 2 · 1	國防の基礎概念與一九三六年の海上	張果 ○	外交時報698號	34 · 1 · 1	九年度總豫算批判	伊藤 正徳
II   4	34 · 2 · 11	從日印會議裏面所看到的日本資本主義底特殊性	張果 ○	中央公論第44年2月號	34 · 2 · 1*	シムラ會商に現はれたる日本資本主義の特殊性	林 要
II   5	34 · 2 · 21	羅斯福底非常時對策	張果 ○	讀書3卷2號 <sup>②</sup>	34 · 2 · 1	ルーズヴェルトの非常時對策	阿部 勇
II   6	34 · 3 · 1	現代自由主義の批判	張果 ○	エコノミスト第12年4號	34 · 2月	現代自由主義の批判	永田 廣志
II   7	34 · 3 · 11	世界軍需工業底概況	張果 ○	世界知識6卷3號	34 · 2 · 15	世界軍需工業の概況	署名なし
II   9	34 · 4 · 1	法國底暴動與政變	張果 ○	世界知識6卷3號	34 · 3 · 1	フランスの暴動と政變	町田 梓樓
II   9	34 · 4 · 1	太平洋英國海軍會議	張果 ○	世界知識6卷3號	34 · 3 · 1	英國海軍會議の意義	石丸 藤太
II   10	34 · 4 · 11	日本爲什麼害怕蘇聯	張果 ○	外交時報703號	34 · 3 · 15	蘇聯を何故恐れるか	長岡 克曉
II   11	34 · 4 · 21	日本右翼改造運動向那裏去	張果 ○	理想47號	34 · 4 · 1*	日本改造運動は何處へ?	山川 均
II   13	34 · 5 · 11	廣田外長論	張果 ○	中央公論第49年4月號	34 · 4 · 1	廣田外相論	馬場 恒吾
II   13	34 · 5 · 11	「日本主義」思想之高漲	張果 ○	唯物論研究18號	34 · 4 · 1	日本主義思想の露漲	坂本 三善
II   13	34 · 5 · 11	蘇聯加入國際聯盟問題	張果 ○	未詳 <sup>③</sup>	未詳	日本主義思想の露漲	水城 忍
II   14	34 · 5 · 21	日本資本主義向那裏轉變?	張果 ○	中央公論第49年5月號	34 · 5 · 1*	日本資本主義はいづれに轉換するか	石濱 知行

胡風と『時事類編』(千野)

〔付記〕なお前記「胡風著譯繫年目録(上)」は『時事類編』三卷三期(35・7・10發行)掲載の「歴史上主觀條件之意義」(原文は永田廣志「歴史に於ける主觀條件の意義」『唯物論研究』26號(34・12・1發行)を胡風の翻譯に含めてゐるが、これはその前號三卷二期(35・1・25發行)の次號豫告で「張果譯」と書かれながら、實際には王明齋が譯したものである。

II-15	34・6・1	菲律賓獨立與日本	張果	○	東京朝日新聞5月10日付夕刊	34・5・9 <sup>③</sup>	比島獨立と太平洋問題	關根 郡平
II-16	34・6・11	蘇聯批評家所看到的日本財政	張果	○	露西亞事情252號	34・5・21	ソ聯批評家の見た日本の財政 <sup>④</sup>	ア・ローゼン
II-17	34・6・21	日本經濟飛躍底眞因	張果	○	中央公論第49年6月號	34・6・1*	日本經濟飛躍の眞因	高橋 龜吉
II-19	34・7・11	軍縮會議之前哨戰	張果	○	改造16卷8號	34・7・1*	軍縮會議の前哨	伊藤 正徳
II-19	34・7・11	滿洲農業移民問題	張果	○	讀書一九三四年六月號 <sup>⑤</sup>	未詳	未詳	矢島淳次郎
II-20	34・7・21	滿洲景氣底畸形性	張果	○	改造16卷8號	34・7・1*	滿洲景氣の跛行性	小泉 吉雄
II-21	34・8・5	動亂漩渦中の德國	張果	○	中央公論第49年7月號	34・7・1*	動亂渦中に立つドイツ	益田 豊彦
II-22	34・9・25	勒覺爾金(短篇小説)	張果	○	文化集團一九三四年八月號	34・8・1	レジョールキン <sup>⑥</sup>	ガブリーロ ウィッチ
II-23	34・10・10	軍國日本底經濟的容貌	張果	○	經濟一九三四年八月號	34・8・1	軍國日本の經濟的容貌	石濱 知行
II-24	34・10・25	陶烈教授底業績 —故廣東中山大學教授陶烈—	張果	○	唯物論研究21號	34・7・5	唯物論者陶烈の業績 —廣東中山大學教授陶烈—	鈴木 直吉
II-24	34・10・25	現代法國文學底轉機	張果	○	行動2卷8號	34・8・1	佛文學の一轉機	小松 清
II-26	34・11・25	蘇聯的宗教問題	張果	○	思想149號	34・10・1	ソヴェートにおける宗教問題	永田 廣志
II-28	34・12・25	作爲農民戰爭の太平天國革命	張果	○	唯物論研究17號	34・3・1	農民戰爭としての太平天國革命	佐野袈裟美
III-1	35・1・10	現代知識階級底困惑	張果	○	改造16卷12號	34・11・1*	現代知識階級の困惑	大森義太郎

- ① 當時の慣例では、『改造』中央公論』の発行は奥付けより一ヶ月ほど早かったので、実際には七月一日頃の発行である。以下\*を付した號はすべて實際の発行が一ヶ月ほど早い。
- ② 『時事類編』には「譯自日本《陸軍雜誌》一九三三年八月號」と記されているが、日本でそのような名稱の雜誌は発行されていない。おそらく『陸軍畫報』の誤りだと思われるが、當該號は発見できていない。
- ③ 『時事類編』には「譯自日本《陸軍》一九三三年十一月號」と記されているが、やはり『陸軍畫報』の誤りであろう。内容はコミンテルン指導者の國防についての發言を集めたものである。原載誌の當該號は発見できていない。
- ④ 目次署名「張果」。譯文冒頭の付記には「果」とある。以下二卷二十一期の譯文まで同じ。
- ⑤ 『時事類編』には「譯自日本《世界經濟情報》」とあるが、そのような名稱の雜誌は發行されていない。今後の調査に待ちたい。
- ⑥ 『讀書』はプロレタリア科學研究所編集の雜誌で、同『何を讀むべきか』が改題されたもの。筆者は未見。この項原文は『永田廣志研究資料集1』編集・發行 永田廣志著作文庫 一九八〇年四月一日）収録のものを参照した。
- ⑦ 『時事類編』には「譯自日本《經濟往來》一九三三年四月號」と記すが、同誌には該當する論文が見當らない。今後の調査に待ちたい。
- ⑧ 當時の夕刊新聞は日付の前日に發賣される慣行だったので、實際の發行の日付は九日になる。
- ⑨ ソビエトの文獻からの翻譯。原載誌不明。
- ⑩ 原載誌は未見。掲載誌名・執筆者名は『時事類編』による。
- ⑪ ソビエトの短編小説を杉三郎が譯したもの。原載誌不明。